

平成 27 年度国立大学図書館協会海外派遣事業参加報告書

東京外国語大学学術情報課

石山 夕記

1. 訪問期間

平成 27 年 11 月 16 日（月）～11 月 21 日（土）

2. 訪問先および担当者

- ① Universitätsbibliothek der Humboldt-Universität zu Berlin / Ms. Frauke Engels
- ② Sächsische Landesbibliothek – Staats- und Universitätsbibliothek Dresden (SLUB) / Ms. Daniela Link
- ③ Thüringer Universitäts- und Landesbibliothek (ThULB) / Ms. Antje Pfeffer
- ④ Universitätsbibliothek Leipzig / Dr. Sebastian Kötz 他 2 名
- ⑤ Staatsbibliothek zu Berlin (Haus Unter den Linden) / Mr. Josef Kurr, Ms. Carolin Dunkel
- ⑥ Staatsbibliothek zu Berlin (Haus Potsdamer Straße)（見学）
- ⑦ Philologische Bibliothek - Freie Universität Berlin（見学）

3. 調査目的

2000 年以降多くの大学図書館が改築・改修工事を行ってきたという日本と類似した状況下にあるドイツにおいて、大学図書館等における学習空間についてインタビュー調査を行い、その特徴や背景となる考え方を明らかにする。

4. 調査成果

調査の結果、対象館からは共通して、以下に挙げる学習空間の特徴を見て取ることができた。

- ・入館ゲート外にカフェなどのスペースはあるものの、ゲート内にラーニングコモنزのようなアクティブラーニングスペースは設置されていなかった。
- ・閲覧席の向きを一方向にする、耳栓自動販売機を設置する、天井を防音構造にするなど、館内の静寂さに対して特に配慮していた。
- ・階段状の吹き抜け構造を利用し、個別学習でも集団学習でもない、空間の共有を重視して閲覧席を配置していた。
- ・外観、内観、装飾品に対する高い芸術性を重視していた。

インタビューからは、これらの特徴の背景にあると考えられる、日本とは異なる学生の学習行動や、アクティブラーニングに対する見解を聞き取ることができた。

- ・学生の学習行動

SLUB では、館内を細かくゾーニングしているものの、学生はそのゾーニングに関わらず、例えばマイクロ室などに PC を持ち込んでグループ学習をしている姿が見られた。またそれぞれの大学図書館において、床や階段のみならず、暖房器具の上、事務室のドアの前、ゴミ箱などあらゆる場所で、学習をしている姿が見られた。ThULB ではこの習性を利用して、館内のカフェの窓際に階段状の席を設けたところ、学生に好まれ非常によく使われるようになったということだった。このようなドイツの学生の自由な学習行動を目の当たりにし、日本においても、ゾーニングを前提とするのではなく、学習行動から学習空間を作り出していくという視点を取り入れられるのではないかと感じた。

・アクティブラーニングに対する見解

調査対象とした全図書館において、ラーニングコモンズのような空間は設置されておらず、今後作る予定もないとの回答があった。ドイツにおいても、アクティブラーニングについての議論はあるものの、各図書館が自館の現状や学生の学習行動と照らし合わせた上で、図書館内にラーニングコモンズのような空間は不要だと判断している。新たな空間の導入の際に、導入自体を目的とせず、各図書館の現状分析に基づいた学習環境作りを追求していくこのような姿勢は、今後の国立大学図書館における学習空間を考える上で、多いに参考になるであろう。

さらに学習空間に間接的に影響を及ぼしていると考えられるその他の背景として、次の要素も挙げられる。

・芸術による図書館の演出の重視

ドイツでは図書館などの公共建築物を改修・改築する場合、EU 法に基づき、一定金額を超える契約について、ヨーロッパ全土に公募をかける。そのため、それまで図書館を設計したことがない建築家や、著名な建築家が担当することがあり、1つ1つユニークな図書館ができあがる。建築家の著作権により、建設後の変更が困難な場合もあるが、インタビューからは芸術性をより重視する姿勢がうかがわれた。さらに建築費用の数%を芸術のために使用する”Percent for Art”という仕組みもある。現在も改修工事中であり、2009 年に部分開館した Staatsbibliothek zu Berlin (Haus Unter den Linden)には、知識・情報・歴史などを感じさせる多くのアート作品が館内に置かれ、学習の“場”としての図書館の演出に大きく寄与している。

今回多くの対象館において、深刻な閲覧席不足を招くほど、利用者が図書館を利用している実態を見ることができた。今後日本の国立大学図書館において、利用者が求める学習空間を実現していく上でも、大いに参考になるであろうドイツの大学図書館の学習空間に関するさらなる調査・分析が必要であると考ええる。

以上